

社会科学の対象

The Problem of Knowledge concerning Society.

渡 辺 安 夫

Yasuo WATANABE

社会科学の客観性はいろいろの形で問題にすることができる。しかし、そのためには、社会科学の対象である社会が、社会として、他のものから区別されてあるということが、先ず最も基本的な問題として要求される。問題というにはそれは余りにも素朴であるが、社会科学の客観性という言葉が社会科学の成立という言葉に置き換えた場合、この問題のもつ意味ははっきりしてくる。社会科学の客観性の問題は、社会科学は科学として成立するのかどうか、という問題に連なるのであるが、それが社会科学として成立するためには、その対象である社会が『社会』という一つの総体として扱われ、他の対象から、さしあたっては自然科学の対象である自然から区別されなければならない。区別されてあるということは、自然科学の対象である自然がそれ自身の法則にしたがって存在するように、社会科学の対象である社会もそれ自身のもつ法則にしたがって自己運動するものでなければならない、ということを含む。社会が人間を契機として構成されるにも拘わらず、主観から区別される客観的実在であるということを含み、断るまでもないことであるが、社会が神からも区別されてあるということを含む。

社会科学の客観性を問題にする場合、その対象である社会は他のものからどのような形で自己を区別し、自立せしめているか、ということが、このようにして改めて問題になる。

ここで問題にしようとしている社会科学はさしあたりはマルクスのそれであることを、あらかじめ指摘しておかなければならない。マルクスの場合、周知のように、社会科学は経済学の形をとっている。しかし、彼の場合、経済学は社会現象の中の単なる一現象を扱うものではない。それは社会諸科学である他の法律学や政治学などと同じ線の上に並立するものではない。経済学はこれら社会諸科学の根柢となるべきものであると考えられている。経済現象を通じてなされる社会認識は社会のある一つの側面についての認識ではなくて、社会の土台についての認識であり、その上において他の社会諸認識もはじめて意味をもつものとされる。社会の経済的構造は社会の現実的な土台であり、社会の解剖は経済学に求めるべきである、という考がそこにはある。したがって、抽出される社会、それは人間と人間との関係の総体として扱えられなければならぬのであるが、その人間と人間との関係が他の社会諸科学の扱える人間関係（法律学も政治学もそれが社会科学の一つである以上、そのすべての現象を本質的には人間関係において扱えなければならない。）の土台とならなければならない、という考がそこにはある。この考を定式化したものが例の経済学批判序言の中のあるものである。(P.K. S. 13) この考が正当なものであるかどうかは、また別の考察に委ねられな

ればならない。が、ここではこの考を前提し、その上に小論の考察を展開することにする。

社会がそのようなものとして捉えられなければならぬ人間相互の関係は、いくつかの社会諸科学の成立が示すように、人間関係を如何なる面で捉えるかに応じて、いくつかの形で示し得る。マルクスの場合、それが経済的側面から捉えられていることから、それが生活資料についての考察を中心とするものであることから、社会は人間相互の関係でありながら、自然との関係をなんらかの形で含まざるを得なくなる。(生活資料——それは自然を人間の側からみたものである。)人間を人間との関係において捉えると同時に、人間を自然との関係において捉えなければならぬことになる。しかも、マルクスにおいては、経済現象は生産を基礎にして捉えられており、生産の形態が消費、分配、交換の諸形態を規定し、これらの相互関係を規定するとされていることから、自然は人間にとって二重の意味で重要になる。労働の主体としての人間が生産において直面するものは自然、労働の媒介なくして存在し、しかも、労働の前提としてそれに先行する自然であるからである。生産は人間の自然に対する関係として、人間と自然とを契機とする一つの過程、運動として成立する。社会現象である経済現象を生産を基礎にして捉えるということは、その人間と人間との関係がなんらかの形で人間の自然に対する関係を含むものとして現われなければならぬということである。経済学であるという理由だけではなく、それが生産を基礎にしている、という理由をも含めて、マルクスの場合、自然はとりわけ重要な意味をもってくる。

そして、このことは断るまでもないことであるが、自然が重要な意味をもつに至ったのは、結果からいえば社会科学が経済学の形をとり、その経済学が生産を基礎にしているからだといえるのであるが、事実においては、それがそのような形をとるに至ったのは、マルクスが人間の存在根拠を社会に求めると同時に自然に求めたということ、そして、結局は人間を自然として把握したからこそである、といえる。社会科学、人間と人間との関係の合理的認識に自然が関係してくるのは、本来的にはこの理由からである。そしてまた、経済学が社会の一つの側面についての認識ではなくて、社会そのものの、そして、歴史そのものの認識であろうとするのも、人間の存在根拠の徹底的な追究がマルクスにあり、その上に社会、(歴史)の把握が行われていたからこそであるといえる。

(一)

マルクスの場合、人間と人間との関係は交換によって成立している。交換はさしあたっては生活資料の交換であるが、そして、マルクスが考察の対象とする商品生産社会では、それは商品という形態をとるのであるが、この商品の交換によって人間は他の人間に関係し、この関係の総体としての社会を形成する。しかし、人間はどうして他の人間と関係せざるを得ないのか。しかも、それはどうして交換を通じてなされざるを得ないのか。この問題は、人間相互の関係が、実は、人間と自然との関係を離れてはあり得ないものである、という問題に連なってゆく。そして、人間と自然との関係は、結局は、人間が自然であることによって成り立つ。

しかし、そうだとすれば、交換を通じて成立する人間と人間との関係は、人間と自然との関係、

そして、それは人間が自然であることによって、また、自然と自然との関係となるのであるが、そのような人間と自然との関係とどのような形で関係するのか、という問題を含んでいる。しかも、人間と人間との関係は、社会科学が科学性をもつためには、それ自身で自立するものとして抽出されなければならなかったのであるから、この問題は重要な意味をもってくる。

さしあたり、ここでは、次のことを明かにしておきたい。

人間はどうして他の人間と関係せざるを得ないのか、という問は、人間はどうして自然と関係せざるを得ないのか、という問に連なってゆく。

マルクスの場合、人間と自然とは引き離されて孤立的に考察されるものではない。人間は人間であることによって自然と鋭く対立する。しかし、両者が『対立』という一つの間を成立せしめ得るのは、実は、前者が後者の基盤において把握されることによってである。人間は人間であることによって自然とは区別される。しかし、人間は人間という形をとった自然である、という意味においては、他の自然と同じである。人間はこの場合、物質—生命—意識（自己意識）という形で捉えられる。つまり、人間は意識的存在であることによって、しかも、単なる意識的存在ではなくて、自己意識的存在であることによって他の自然から区別される。しかし、同時に、人間は生きた物として、身体的存在として、人間であり、自然である。人間が物質—生命—意識の形をして在るということは、マルクスの言葉でいえば、『生きた、自己意識ある物』として在ることは、(K. S. 211)人間が有限的、相対的存在として在ることである。物質、生命、意識のそれぞれの形において、人間は、つねに、他のものと必然的に関係せざるを得ない。他のものとの関係においてのみ人間は人間でありうる。物質—生命—意識的存在であり得る。

物質としての人間は意識の外に存在するものであり、意識に対しては感性的対象という形で在る。感性的対象であるということは、しかし、それが有限的存在であり、他のものとの関係においてのみ存在し、一定の条件のもとでのみかかるものとして存在し得るものである、という意味を含んでいる。対象的存在として他の感性的対象に対する、という意味を含んでいる。マルクス自身の言葉を掲げてみる。

『その自然を自分の外にもたない存在は、決して自然的存在ではなく、自然の存在に参与しない。自分の外に如何なる対象をももたない存在は、決して対象的な存在ではない。それ自身が第三者に対して対象でない存在は、自分の対象として如何なる存在をももたない。つまり、対象的にふるまわない。彼の存在は対象的な存在ではない。』(H. S. 85)

『对象的に、自然的に、感性的にあることと、自分の外に対象、自然、感性をもつこととは、または第三者に対して自分自身が対象、自然、感性であることとは同一のことである。』(H. S. 85)

人間が自然であること、感性的対象であることは、人間が自分自身の外に存在する他の自然と関係することによってのみ、存在しうることを示す。人間が客観的諸条件を離れては存在し得ないのであることを示す。しかし、人間が物、感性的対象として自然であると同時に、生きた物として、生きた感性的対象として自然であることによって、感性的対象である人間の他の感性的対象である

自然との関係は身体的、感性的対象と他の感性的対象との関係となる。単なる感性的対象と単なる感性的対象との関係ではなくて、身体的、感性的対象がそのようなものとして存在しうるための関係となる。生命と、生命がそのようなものとして存在しうるための客観的諸条件との関係となる。具体的には、それは、人間と自然との間に成立する質料変換という事実を媒介として成立する。さきほど掲げた言葉に続いて、次の言葉が意味をもつことになる。

『人間が身体的な、自然力的な、生きた、現実的な、感性的な、対象的な存在である、ということとは、人間が現実的な、感性的な諸対象を彼の存在の対象として、彼の生命発現の対象としてもつということ、つまり、人間は現実的な、感性的な諸対象においてのみ、彼の生命を発現できる、ということの意味する。』(H. S. 85)

『彼の本能の諸対象は彼の外に、彼から独立した諸対象として実存している。しかし、これらの諸対象は、彼の欲望の対象であって、彼の生命諸力を働かせ実証するのに欠くことのできない本質的な対象である。』(H. S. 85)

人間と自然とは不可分離なものとしてある。身体的存在としての人間、生命ある物としての人間は、人間がそのようなものとして存在しうるための客観的諸条件を自らに併せ得たとき、両者を併せたその全体において、はじめて現実的であり得る。人間、または、生命の概念は客観的諸条件である自然を併せたその全体において成立する。それは、丁度、意識の概念が、その対象を併せもつとき、はじめて現実的な概念でありうるのと同じである。そして、このことは、自然が人間の身体であると考えるとき、更に徹底する。自然が人間にとって決定的な意味をもつようになる。

『自然、つまり、それ自身が人間的肉体でない限りでの自然は、人間の非有機的的身体である。人間が自然によって生きるということは、言い換えれば、自然が人間の身体であり、人間は死ぬまいとすれば、自然によって絶えまない前進をつづけなければならぬ、ということである。』(K.L. S. 103)

自然は人間に与えられたものであり、随って、それは、彼の皮膚、彼の感覚諸機関と同じような彼の活動の前提である、と同時に、自然は人間によって形成されるものであり、この形成を通じて、実は、人間は人間として存在しうるのである。それ自身が身体的存在である人間は、自然を自らの身体とすることによって、それは飽くまでも非有機的的身体という意味においてであるが、人間として現実存在しうる。

しかし、自然を自己の身体とするといっても、その自然が非有機的的身体であるという理由から、又、人間が『生きた物』であると同時に『自己意識のある生きた物』であるという理由から、人間と自然との関係は直接的な関係、または、限られた一面的な、固定した関係ではあり得ない。問題にしている段階では、両者の関係は質料変換という事実を媒介にした関係となって現われる。それは、人間が自然になり、自然が人間になる、という形で把えられるのであるが、具体的には、それは、生産と消費という形で把えられる。そして、さしあたりは生産よりも消費が、(生産は反面消費であり、消費は反面生産でもあるが、だからこそ、それらは質料変換をなしうるのであるが) 所

謂生産よりも所謂消費が問題になる。つまり、人間は、さしあたりは、食うこと、飲むことによって自然と関係し、そのような行為によって、自然との間に質料変換を成立せしめる。そこでは、自然に媒介されて人間の側に質料変換が成立する。しかし、消費は本来的には、生産を前提するから、また、人間が自然そのものと、(その典型は土地である)関係するのは、本来的には、生産においてであるから、人間と自然との関係は、質料変換という事実は生産においてこそ捉えられなければならない。質料変換は人間に媒介されて自然の側に成立するという形で捉えられなければならない。そして、人間が『生きた自己意識ある物』であることが、人間の自然に対する関係を人間特有の形にする。人間が自然と必然的に関係せざるを得ないのは人間が身体的存在であるからであるが、人間が自己意識的存在であることは、人間と自然との関係を身体的組織の制約から解放せしめる。次の言葉が意味をもってくる。

『動物は直接的な肉体的な欲望に支配されて生産するだけである。ところが、人間自身は…肉体的欲望からの自由の中ではじめて真に生産する』(K.L. S. 105)『動物はその属している種の基準と欲望にしたがってかたちづくるだけであるのに対して、人間はあらゆる種の基準にしたがって生産することができ、また、どの場合にも、対象に対してそれ固有の基準を与えることができる。人間は美という法則にしたがってかたちづくることもできる。』(K.L. S. 105)

人間と自然との間の質料変換は人間の意識を通じて、意識的な行為を通じて成立する。人間は自然の形態変化を生ぜしめるだけではなくて、自然のうちに、同時に彼の目的を実現するのである。それは、単なる事実ではなくて、意味をもった事実となる。

この質料変換は、それが、人間と自然との間に成立するものであり、人間が人間という形をした自然として人間的側面と自然的側面をもつことからして、質料変換そのものが人間の側からみた面と自然の側からみた面との両面をもつ。質料変換が人間の働きかけによって成立し、その結果が人間にとって意味のあるものであるという限りにおいて、それは人間の側からの面を構成し、人間が感性的対象としてあり、自然に対しては一の自然としてあるという限りにおいては、それは自然の側からの面を構成する。前者の場合、欲望(目的)、労働過程(生産過程)、結果(生産物)のそれぞれの段階において人間の側からの考察が可能になる。自然は欲望の対象としての自然、人間の欲望に適合させる合目的的な活動の対象としての自然、人間の目的がその中に実現されている、人間にとって有用なものである自然等々。この面からすれば、質料変換は特殊な自然質料を人間の特殊な欲望に適合させる特殊な合目的的、生産的活動とその活動の対象である自然との間に成立するものである。(人間の側にも自然の側にも特殊性が前面にでてくる。)人間はつねに自己自身の側に立ち自然に対する。欲望、(それはヘーゲルも指摘するように自己意識の典型である。P. H. S. 135)労働過程、結果において人間は自然をではなくて、自分自身を、対象化された自分自身を意識し、自分自身を産出する。人間を他の自然から区別せしめる自己意識が、この面における人間と自然とを規定する。自然は人間の側からみられた自然となる。しかし、これは反面において感性的対象と感性的対象との関係でもある。自然と自然との関係でもある。質料変換という事実は、こ

